

鎌倉府体制下の武家社会

〈都市鎌倉における武家奉公の諸相〉

鎌倉学園高校 風 間 洋

一、はじめに

周知のように一三三三（元弘三）年五月、北条高時以下の一門は新田義貞らの大軍によって滅亡し、源頼朝以来、一四〇年余り続いてきた鎌倉幕府は、ここに終焉を迎えた。京都では後醍醐天皇が建武の新政を開始するが、この新政はわずか数年で崩壊、続いて政權を奪取した足利尊氏も、一三三六（延元）年十一月、京都に室町幕府を開いたため、政治の中心は二度と鎌倉に戻ることはなかったのである。

だが、鎌倉幕府滅亡後も鎌倉は、東国支配の拠点としての重要性は看過できないものがあつたため、建武の新政下では「鎌倉將軍府」が置かれ、室町幕府も「鎌倉府」という出先機関を設置した。鎌倉府は、足利尊氏の子孫が代々「鎌倉公方」として鎌倉府の首長となり、関東管領上杉氏の補佐を受けながら、政務を運営した。室町幕府同様、事務官僚である奉行衆、公方直轄軍の奉公衆らも構成され、政所・侍所・評定衆・諸奉行なども置かれた。管轄する関東八ヶ国と伊豆・甲斐の守護職の任命権は、あくまで幕府にあつたが、次第に諸権限が鎌倉府に移行するに及んで、序々に幕府から独立した東国支配を行うようになったため、鎌倉府は幕府と衝突、鎌倉府内部でも公方と関東管領上杉氏が対立して、ついに一四三八（永享一〇）年、四代公方足利持氏は、將軍足利義教・関東管領上

杉憲実によって滅ぼされ（「永享の乱」、約一世紀続いた鎌倉府は滅亡するのである）以上の概略は、渡辺世祐氏『関東中心足利時代の研究』新人物往来社 一九七一年を参照されたい。

たいてい日本史の授業では、鎌倉幕府滅亡後は政治の中心が京都に移ってしまったため、鎌倉府などは室町幕府の職制の一つとして簡単に触れられる程度であろう。限られた授業時間数の中で致し方ないこともかもしれない。だが、再び政治の中心が東国に戻ってくる江戸時代まで、ほとんど生徒達は自分たちが住んでいる東国（関東）史を知らずにいる。自分が生活している地方史、地域史に大きな断絶があるのは、何とも残念なことである。

ちなみに報告者の勤務校は鎌倉にあり、鎌倉期の授業をする際には、その環境を大いに利用しようと試みている。しかし、その後の南北朝・室町時代の授業に入ると足利氏や上杉氏に関わる史跡も多くの点存在するにもかかわらず、ほとんど活用できていないのが現状である。本報告は自戒の意味も込めて、近年目覚ましい成果を上げている中世東国史の成果に拠りながら、南北朝・室町期の鎌倉の様子、特に研究が手薄な武家奉公の実態に迫ってみたい。

二、南北朝・室町期の都市鎌倉についての基本的理解

はじめに南北朝・室町期の都市鎌倉に関する大まかな研究動向を整理しておきたい。

まず、「一三三三（元弘三）年の新田義貞による鎌倉攻めによって、政治の中核部は大きく破壊されたため、著しく都市機能も低下した。」ととらえる見解、いわゆる「鎌倉衰亡論」がある。これは、これまで通説的に述べられてきており、歴史教育の現場でも漠然と

受け容れられ、大きな影響を与えている。高樺光寿氏『鎌倉市史』総説編 吉川弘文館 一九五九年、大三輪龍彦・石井進氏編『武士の都鎌倉 よみがえる中世』平凡社 一九八九年、松尾剛次氏『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館 一九九三年など。

これに対して、近年の中世東国史の研究が深化するにつれて、衰亡論にも再検討がなされるようになってきた。佐藤博信氏は、戦国期の鶴岡八幡宮寺の再建に注目し、鎌倉に存在する僧侶・職人の活動を描き出し、決して鎌倉が都市機能を失ってはいないことを印象づけた。ただし、対象とされた時期は戦国期であり、南北朝・室町期の鎌倉ではない。佐藤氏『「快元僧都記」の世界像』『日本歴史』五二二 一九九一年。

また、湯山学・藤木久志氏は、かつて室町期の鎌倉にも祇園祭が行われていたことに注目、「鎌倉の政治的機能の低下は否めないものの、むしろ町衆の商業活動は一層活発となり、商業・手工業地区は拡大している。」と、初めて鎌倉府体制下の鎌倉について言及されたのである。湯山氏『鎌倉の祇園会』一〇九『波』一〇三―一一二 一九八四―八五年・藤木氏『中世鎌倉の祇園会と町衆』『神奈川県地域史研究』一一 一九九三年。

さらに注目したいのが、中世考古学の成果である。特に長年鎌倉の発掘に携わり、考古学の立場から積極的発言をされている河野真知郎氏は、「新田の鎌倉攻めは数日の混乱ではないか。考古学の立場からすれば、鎌倉期と室町期間の遺構の断絶は少ない。」との見解を示した。河野氏『中世都市鎌倉』講談社 一九九五年。

このように近年の研究によって、「衰亡論」一辺倒の状況は克服されつつある。しかし、鎌倉幕府滅亡後の「都市」としての鎌倉の

存続は認められ始めたものの、それはあくまでも町衆ら民衆の目覚ましい商業活動のそれであり、「東国の首府」として鎌倉の評価は必ずしも高くない。つまり、当然鎌倉に参集していたと推測される武家の姿が、全く見えてこないのである。これは、先述したように鎌倉府自体が永享の乱で滅亡してしまったため、残された文献史料が圧倒的に少ないことに起因するであろう。この厳しい状況の中で、山田邦明氏の「室町時代の鎌倉」(『都市の中世』吉川弘文館 一九九二年)は、概説的ながら鎌倉府に集う武士や禅僧たちの動向を跡付けた貴重な仕事であり、同じく最近、松尾剛次氏『中世都市鎌倉を歩く』(中公新書 一九九七年)も啓蒙書ながら鎌倉幕府滅亡後の鎌倉にも目を配った記述がみられる。

以上、先学の成果を踏まえて南北朝・室町期の鎌倉に集う武家奉公の様子を具体的に見ていきたい。

三、鎌倉府体制下の武家奉公の実態に迫る視点として

鎌倉府に集う武家奉公の実態は、どのようなものだったのだろうか。今回の報告では、A 儀礼的な側面、B 経済的負担、C 鎌倉への参勤・集住の様子、この三点に注目し残された史料から検討してみたい。

A 儀礼的な側面

史料の極めて少ない状況にあつて、鎌倉府の故実書『鎌倉年中行事』(別名「成氏年中行事・殿中以下年中行事」)は、鎌倉公方を頂点とする鎌倉府の年間行事や礼秩序を知ることができる貴重な史料である。この書誌的解題を試みられた佐藤博信氏によれば、成立は一四五四(享徳三)年でありながら、登場する人物や詳細な内容な

どから、鎌倉府の最も安定した時期（おそらく三代公方足利満兼の一四世紀末ごろ）の状況を忠実に再現したもの、と評価されている。〔「殿中以下年中行事」に関する一考察〕『民衆史研究』一〇一九七二年〕。

冒頭の「京都鎌倉ノ御両殿ハ天子ノ為御代官」という書き出しから、鎌倉公方が自己を「政務代行者」として將軍と同列に位置づけているのがわかる。単なる幕府の出先機関ではないという強固な意志の現れとして注目しておきたい。一月の枕飯行事一つをみても、元旦は管領上杉氏や御一家という鎌倉府内で最高位の武家が務め、国人や一揆など中小武士は一四日以降に務めるのが決まりであった。すなわち管領・御一家・外様・奉公衆・国人・一揆の諸階級には、出仕体面など儀礼の面で厳密な区別があった（峰岸純夫氏「東国における十五世紀後半の内乱の意義」『中世の東国』東大出版一九八九年）のである。ただ、この故実書を使用して田辺久子氏が鎌倉府の年中行事の実態に迫ろうとされているが（「年中行事にみる鎌倉府」『神奈川県史研究』四九一九八二年）、史料自体が難解で、部分的使用に止まっているのが現状である。『鎌倉年中行事』の総合的な研究は、今後の課題であろう。

さて、一三九一（明德二）年には、これまでの管轄国に陸奥・出羽の二方国が加えられることになるが、周知のように奥州には、かねてより幕府管領斯波氏の一族大崎氏が、奥州探題として君臨しており、そこには探題を頂点とする礼秩序が確立していたことが、指摘されている。（伊藤喜良氏「国人の連合と角逐の時代」『中世奥羽の世界』東大出版一九七八年）。『余目氏旧記』という記録には、鎌倉府に編入された奥州武士たちが公方御所の庭に「つくばって」

かしくまる中、遅れたうえに輿に乗って公方の面前に悠然と出頭する探題大崎氏の振る舞いに対して、関東管領上杉氏が「華飾なり」とその無礼を咎める場面が記されている。だが、大崎氏は將軍様より己が奥羽一円を任せ置かれたのだと反論、儀礼の家格も幕府管領斯波氏と「御同輩」と主張し、結局鎌倉公方も咎めることができなかつた、という。もちろん、この記録は探題大崎氏を顕彰する意図で記述されているため、すべてを信用する訳にはいれないが、ここに「天子の御代官」を自負する鎌倉公方の礼秩序と探題を頂点とする奥羽の礼秩序が衝突している事態をみてとれるだろう。さらに、当然ながら京都には室町幕府を頂点とする礼秩序も厳然と存在していたのである。鎌倉府、奥州探題、そして幕府という錯綜する礼秩序がどう切り結んでいたのだろうか。そして、こうした複雑な礼秩序の中で、鎌倉府管轄下にあった武士たちが、どのように現実を認識していたかを検討する必要があるだろう。

常陸の国人眞壁朝幹は、京都將軍と鎌倉公方が激突した永享の乱に際して、「当初この戦いは、公方足利持氏と関東管領上杉憲実の府内の抗争と認識していたので、当然持氏のもとへ馳せ参じたのである。だが、その後この戦いが將軍と公方の争いであるのを知って、慌てて管領に一味したのである。」との見解を吐露している（『眞壁文書』）。また、下野の国人茂木知貞も「鎌倉乃御公事」と同時に「京進」負担も務めることを子孫に対して書き遺している（『茂木文書』）。鎌倉府体制下に組み込まれていた武士たちが、室町幕府（將軍）をどのようにとらえらえていたのかを知る興味深い史料である。

B 経済的負担

鎌倉府が東国の政務を運営するうえで、当然生ずる費用は、管轄

国下にある武士たちに賦課されたであろうことは、容易に想像できるだろう。一種の御家人役として理解できるのではないかへ松本一夫氏「南北朝・室町前期における茂木氏の動向」『日本歴史』五二二一九九一年。特に鎌倉府が催す諸行事の要脚負担を命ずる史料が散見される。

一四〇〇（応永七）年一二月、下野国人の長沼秀直は、「明年正月七日椀飯」勤務を催促されている（『皆川文書』）。具体的な内容は不明であるが、椀飯儀式の参列・運営のほか、費用負担も命ぜられたのであろう。武蔵の別府幸直は一三八三（永徳三）年三月、足利直義三十三回忌仏事に際して三貫文の負担を命ぜられている（『東大史料編纂所蔵文書』）。この「三貫文」の負担額が別府氏にとつてどの程度の負担だったのかは定かでないが、一四三〇（正長三）年一〇月の上野の有力国人岩松土用安丸の申状は、次のような興味深い内容を示している（『正本文書』）。

永安寺殿（＝二代公方足利氏満）三十三回忌仏事に際して、公方足利持氏から「拾結（＝十貫文）」の負担を命ぜられた岩松土用安丸は、負担があまりに大きく到底負担できないため、暇を賜り「下国」したいとも思ったが、特別な仏事でもあるため、なんとか「巻結（＝一貫文）」の負担をすることで勘弁してもらおうとした。だが、公方持氏はこれを不満として「御信用」してくれず、土用安丸は「参結（＝三貫文）」の負担をするので、何とか「善政」の「御裁許」を得たい、と哀願しているのである。

以上のように、重い負担に苦しむ様子が切々と述べられている。岩松氏のような上野を代表する国人領主でもこの有り様であったとすれば、相対的に鎌倉府が課す諸行事の費用負担は、武士たちにと

ってかなり辛いものだったと推測できよう。

その他、一四一七（応永二四）年一二月には武蔵武士の連合体である南一揆が、前年勃発した上杉禅秀の乱での「忠節」の恩賞として、五年間の「政所」費用負担（ただし炭・油は除く）を免除されている（『武州文書』）。すなわち裏返せば、鎌倉府政所の日常の諸経費が、御家人役で賄われていたことを示している。そして、こうした費用負担の免除が「御恩」の一種として理解されていたことにも留意しておきたい。

このように椀飯勤仕や仏事要脚、鎌倉府の政所諸費用などは、管轄下の武士に広く賦課されていたと思われるが、別途に守護大名クラスの武士には、御所の造営負担も課せられていたことが、『鎌倉年中行事』にみえる。そこには禅秀の乱で焼失した御所の「御評定所ハ十五間、管領（＝上杉氏）ノ役所也、御主殿ハ佐竹、御遠侍ハ：千葉介役所也」とあり、この他に結城・小山・那須・宇都宮・三浦介など、各建造物ごとに有力大名が割り当てられ、新御所の落成がなった、という。これは室町幕府が御所造営を有力守護大名に負担させた守護役と対応するものではないだろうか。

もちろん、このような経費負担と共に武蔵の江戸房重のように「一番衆」として一カ月間の御所警備も同時に割り当てられていたのであり（『古簡雑纂六』）、平時といえど鎌倉府支配下での武家奉公は決して悠長なものではなかったといえよう。

C 鎌倉参勤・集住

室町幕府のある京都では、領国経営を守護代以下の家臣に任せ、有力守護大名自身は、將軍御所の周辺に屋敷を構えていたことは、周知の事実である。一方、鎌倉では官僚である奉行衆や親衛隊の奉

公衆が常勤していたであろうことは、ある程度想像がつくが、守護大名クラスが本領を留守にして、鎌倉に常駐していたかどうかは、史料を欠いていることもあり、まだ検討の余地を多く残している。江田郁夫氏「鎌倉府体制下の在倉制について」(『国史談話会雑誌』三五 一九九五年)のような仕事を更に深化させる必要があるだろう。

一三九一(明德二)年に奥羽が鎌倉府の管轄下に入ると、公方氏満が早々に奥羽の有力大名白河結城氏に対して要求したのが、鎌倉に「馳参」ずることであった(『結城小峯文書』)。おそらく鎌倉府管轄下の武士たちが鎌倉に参集したのは、ある程度公方側の働きかけがあつたことだろう。

しかし、京都のように常駐するのが義務化していたかどうかは別である。ただ、断片的な史料だけを拾ってみてもかなりの武士が、鎌倉に集住していたことが確認できる。

例えば『米良文書』所収の「旦那名字注文写」は、鎌倉にも吉良・石堂・畠山・今川・一色など足利一門が、集住していたことを示す興味深い史料である。その中で、畠山・加子・桜井氏などには「定在鎌倉」の注記がある。また、吉良や石堂氏など一門でも家格の高い家柄には、「公方様」といえども対面の後は「御門」まで見送りをするしきたりがあり、逆に家格の低い吉見氏などは「不断」は武蔵吉見郡に在国しており、「年一度鎌倉参上」するだけであつた。先に触れたように、足利一門内でも、厳然たる礼秩序が存在するのである。また、一三九七(応永四)年十一月付けで、奥羽国人の岩城氏と思われる武士が、「鎌倉當参合力銭」として国元に「老貫文」の請取状を出しており(『飯野文書』)、鎌倉集住を維持するために、かなりの出費をしていた事がわかる。国元と違い、都市

鎌倉はやはり物価も高かったに違いあるまい。こうした鎌倉に暮らす奥州武士の様子を『余目氏旧記』は生き生きと描いている(長沼孝之「『余目氏旧記』の世界」『鎌倉』七六 一九九四年)。

それによれば、両国探題以下多数の武士が「在鎌倉」をした。一年つめた者、九年つめた者もいれば、留守家明(中奥羽あたりを本貫とする武士)に至っては、一九年も「在鎌倉」をしたという。大宝寺氏(出羽庄内を本貫とする武士)と山内氏(中奥羽地方を本貫とする武士)などは寄り合つて、二〇間の家を二百文で買つて半分ずつ宿所にしたという。そのうち公方氏満が逝去すると、家明は陸奥の塩竈神社の神人も兼ねていたため、親が亡くなつても決して落髮などしなかつたのに鎌倉では公方の冥福を祈つて剃髪したため、鎌倉童たちに「小入道」と嘲笑された、という。

もちろん、この記載すべてを鵜呑みにはできないが、本領を離れて鎌倉に常住する武士たちが多数存在し、それもかなりの年数だったのだろう。九、一、一九年など一定していないことが本当であるならば、厳密な「在鎌倉」の規定などは無かつたのかもしれない。他にも鎌倉に住む奥羽武士の劣悪な住宅事情、鎌倉童に嘲笑される田舎武士の様子など、具体的な記述があつて興味深い。

公方にとつて、武士の鎌倉参集は自己の權威を誇示する極めて有効な手段であつたろう。だが一方、物価も高く、住宅事情も決して良くない鎌倉に集まる武士の側にもメリットがあつたのではなからうか。ここで明確な解答を用意するだけの力量は報告者には毛頭ないが、幕府と鎌倉府の対立が深まる不安定な政局の中、鎌倉府の膝下に居ること、いち早く正確な情報を得られるかどうかは、大きな問題であつただろう。また、活発になりつつある商品経済に地方

武家も決して無縁ではいらなかったはずである。本領では手に入らない物資が鎌倉の外港六浦・神奈川には集積されていたへ綿貫友子『中世東国の太平洋海運』東大出版 一九九八年等を参照。鎌倉幕府が減んだとはいえ、やはり東国では鎌倉は唯一の「都市」であつたのである。

だが、多数武士が鎌倉に参集した最大の目的は、やはり東国に君臨する鎌倉公方の権威を、自己の所領支配や一族統制に利用することだつたと思われる。例えば、一四二八（応永二五）年正月二九日、下野国人長沼義秀は「病気危急（「危篤」）の状態、速やかに孫憲秀への家督譲渡が行われるよう、公方の「御意」を得るため御所奉行の要職にあつた穴戸持朝に申し継ぎを依頼している。この翌日、持朝は公方への取り次ぎが行われた旨を義秀書状の裏にしたためている（『皆川文書』）。書状の出された翌日に返事が裏書きされるためには、義秀が鎌倉に居住していなければ不可能であろう。南北朝・室町期においては、これまで一族を統率していた惣領制も動揺し（永原慶二「東国における惣領制の解体」『日本封建制成立過程の研究』岩波書店 一九六一年）、惣領の統制から独立を試みる庶子・動揺する所領支配の歯止めを掛けるには、公方の権威に接近するのが、最も有効であつたのだろう。先にみたように、仏事要脚の重い負担に対して、何とか「下国」せず鎌倉に止まって減額を哀願する岩松土用安丸の立場も、同様な心理が働いていたのではなからうか。過重な公方の負担に耐えながらも鎌倉に居住して、権威に接近して動揺する一族をまとめようとする惣領と、家督継承という一族内部の問題に介入し、支配を浸透させようとする公方の利害は、ある意味で一致していたのではないだろうか。

D. 南北朝・室町期の都市鎌倉の復元

さて、鎌倉に集住する武家がかなり存在したとなると、鎌倉府体制下での鎌倉が、どのような都市空間を形成していたが問題となる。無謀を承知で断片史料からできるだけ復元してみたい。当時の文献史料のような一級史料から『新編鎌倉志』のような近世地誌や『鎌倉大草子』のような誇張も多い軍記物まで通覧して武家屋敷の所在をまとめると、屋敷を構えていた地名まで分かるものが二六家程度、そのほか鎌倉郊外に在住していた武家が二家程度、屋敷地は特定できないが、鎌倉に居住していたと思われる武家は一四家程度確認できた（詳細は大会当日配布したレジュメ「南北朝・室町期武家屋敷一覧」を参照されたい）。

さらにこれを旧鎌倉都市部の地図上に落とししてみたのが、「中世鎌倉都市図 南北朝・室町期」である（大会当日配布レジュメを参照）。もちろんこれらの表・地図は不十分極まりない図表であり、更に訂正・加筆し精密を期すべきものではあるが、当時の鎌倉を考察するうえで、大まかな傾向ぐらいは把握できそうである。

ちなみに『吾妻鏡』の記述をもとに作成した鎌倉御家人の屋敷分布図（貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』別巻付録図 新人物往來社 一九七九年）と比較すると、鎌倉期の有力御家人屋敷は鎌倉北部の山間の谷戸から南の海岸近くまで全域に分布し、特に鶴岡八幡宮寺周辺やそれを南下するメインストリートの若宮大路周辺には幕府や執権北条氏の邸宅が集中している。これに対し、室町期の武家屋敷は鎌倉公方御所を初めとして、むしろ武蔵方面から六浦・金沢へと東西に鎌倉を貫通する道路を意識して北部に屋敷を構えている。鎌倉北部の山間部に屋敷が集中し、海岸部や若宮大路周辺には、目立つ

た武家屋敷は見られないのである。なぜ御所を初め管領上杉氏など、ほとんどの有力武家屋敷が北部の山間に引っ込んでしまったのか、現在のところ明確な説明はなされていない。①新田義貞の鎌倉攻めによって若宮大路などの市街の中心部が徹底的に破壊されてしまったためへ高柳氏前掲書など、②町衆の活動が盛んとなって商業地区が海岸部から中心部まで進出して来たためへ藤木氏前掲論文、③鎌倉時代以来、足利氏の屋敷が淨妙寺の隣のここに置かれていたため、そのまま鎌倉御所として使用されたへ松尾氏前掲書『中世都市鎌倉を歩く』④鎌倉幕府ほど実力のなかった鎌倉府は防御に便利な山間部の谷の奥に御所を構えたへ石井進氏「文献からみた鎌倉」鎌倉考古学研究所編『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部 一九九四年）などが挙げられているが、さらには⑤御所の東には六浦・神奈川の貿易港が開かれており、江戸湾流通を意識した立地条件へ拙稿「鎌倉府の関所支配について」『鎌倉』七五一九九四年など）とも考えられはしないだろうか。

こうして、諸説が唱えられている鎌倉御所の立地理由であるが、いずれも推測の域に止まっており、決定的な史料の裏付けを欠いている。やはり、文献史学の限界を克服するためには、歴史地理学へ山村亜希氏「中世鎌倉の都市空間構造」『史林』八〇―一二 一九九七年）からのアプローチや、中世考古学の成果へ一九九四年の公方屋敷跡や一九九五年の上杉禪秀邸跡など）にも期待し、総合的な検討が望まれよう。

四 おわりに

以上、鎌倉幕府滅亡後の都市鎌倉の再評価をすべく、鎌倉府体制

に組み込まれていた武家奉公の様子をさまざまな角度から眺めてみよう」と試みたが、結局史料の羅列に終始し、まとものないものとなってしまった。鎌倉幕府から鎌倉府への連続・非連続性の検討、鎌倉府と室町幕府との間の儀礼や御家人役など経済負担の比較、室町期の鎌倉の都市空間の復元・検討など、残された問題はすべて後日を期すことにしたい。

また、忘れてならないのは、鎌倉府は永享の乱で一旦は滅亡するものの、公方足利持氏の遺児成氏が、再び奉公衆らを結集して鎌倉府を再興、一四五五（享徳四）年に下総古河に移った後も古河公方を称して、戦国時代に入ってもなお、東国のなかで無視しえない伝統的権威を保っていくのであるへ佐藤博信氏「古河公方足利氏の研究」校倉書房 一九八九年）。こうした近年の古河公方研究の目覚ましい進展によって、後北条氏一辺倒だった関東戦国史の権力論も大きく改められつつある状況にある。こうした流れを受け、授業でも新たな東国史、中世史像を提供したいと考えている。

〔付記〕

本報告は、論点を絞り込めぬまま、現在報告者が課題としている内容を中間報告的な形でまとめたに過ぎない。後日、全面的に書き改める予定である。諸賢からの厳しいご叱正、ご教示を賜われれば幸いである。